

まちあるきカウントシステムを利用した 地域における回遊行動向上の検討

吉岡 茉里子* 内平 隆之** 中桐 斉之*

兵庫県立大学環境人間学部* 兵庫県立大学地域創造機構**

1 はじめに

近年、歩くことに対する社会的関心が高まっており、「まちあるき」を利用して地域活性化支援を行う例が増えている[1]。

この支援では、利用者が目的地だけではなく周辺にも目を向け、まちを歩行・滞留し、経済活動を行うこと(以下、この行動を回遊行動とする)が必要とされている。

従来では、まちあるきを利用した支援として、スタンプラリー形式のイベント開催やモデルコースの作成などが採用されている。これらの支援は、利用者が効率よく目的地を巡ることができるほか、目的地間を直線的に移動する経路の活性化を行うことが期待できる(図1)。しかし、図1のように、目的地どうしを結ぶ直線上から離れた場所にある施設や店舗には、目を向けないままになりがちである。さらに、塚中らは、経路表示や観光名所推薦をする支援では、新たな体験や発見が制限される可能性があるとして指摘している[2]。したがって、まちあるきを用いた支援では、まちあるきの対象となる範囲全体を面として捉え、目的地間を移動する直線だけではなく、面的な支援が可能となる仕組みが必要である(図2)。

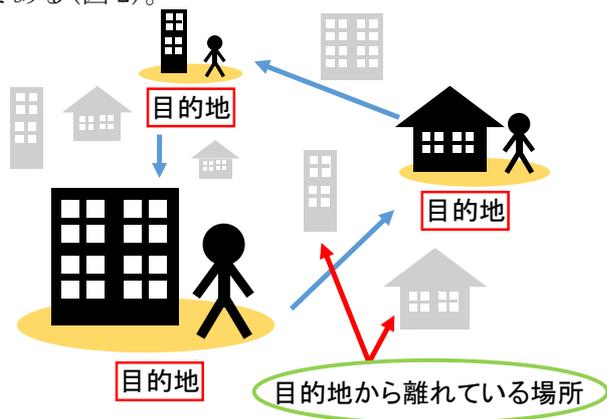


図1 従来のまちあるき支援



図2 必要とされるまちあるき支援

また、従来の方法では、期間限定のイベントとして開催されるものも多い。しかし、まちあるきは、通勤通学や生活用品の購入など、普段の日常生活でも行われる動作である。そのため、日常生活でも取り入れてもらえる仕組みであることが必要だと考える。

そこで本稿では、利用者のまちあるきにおける回遊行動の支援を、対象となる範囲全体で行うことが可能であり、かつ、日常的に利用してもらえる仕組みを構築する。そして、支援システムとして構築した「まちあるきカウントシステム」を活用し、より効果の高い地域活性化支援の実現を目指した。

2 まちあるきカウントシステム

2.1 まちあるきとは

本稿では、まちあるきの定義を「目的の有無に関わらず、ある一定の範囲内を、乗り物などを利用せずに歩く、もしくは滞在すること」とする。

2.2 まちあるきカウントシステムとは

まちあるきカウントシステムとは、システムに設定した範囲内(以下まちあるき範囲とする)でまちあるきをすることで「カウント」が増加していき、カウント数が一定以上になるとインセンティブが取得できる仕組みである(図3)。

まちあるき範囲全域の支援が可能であり、目的地なども指定していないため、利用者が周りに目を向けながらまちあるきを行う支援を促すほか、利用者が目的を持たずにまちを散策する場合でも支援が可能である。

「Examination of enhancing the walking around the city by Walking in the Count System」

「Yoshioka Mariko・Uchihira Takayuki・NAKAGIRI NARIYUKI・University of Hyogo」

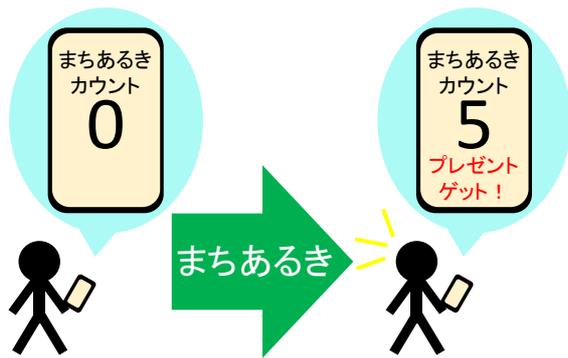


図3 まちあるきカウントシステムの概要

2.3 開発環境

また、本システムはAndroidアプリとして実装した。開発環境を表1に示す。

表1 システムの開発環境

OS	Windows8.1
開発ソフト	AndroidStudio(2.2.3)
開発言語	Java

3 実証実験

まちあるきカウントシステムの効果を検証するために実験を行った。既存のまちあるき支援システムとは異なるため、既存のシステムとの比較実験を行った。実験の概要を表2に示す。

3.1 実験の概要

①既存の支援システムの設定

既存の支援システムとして、フォトスタンプラリーを設定した。これは、指定した3つの場所の写真を、利用者に集めてもらうというものである。15名に協力してもらった。

②まちあるきカウントシステムの設定

今回は、3分間まちあるきをするごとにカウントが1増加する設定にした。利用者には、カウントが5以上になるまでまちあるきを続けてもらう。協力者16名のうち、10名には通常のシステムを(図4a)、6名にはおすすめスポットが紹介されるシステム(図4b)を使用してもらった。

①②どちらのシステムも、最短所要時間は約15分に設定し、インセンティブとしてコンビニで利用できるクーポン300円を設定した。実験終了後にアンケートを実施した。

3.2 結果と考察

実験の結果、まちあるきカウントシステムには既存のシステムと同等以上のまちあるきを楽しむ効果があり、日常生活のふとした瞬間で使用してもらえる可能性があるほか、店舗や施設



(a)通常のシステム

(b)おすすめスポット表示

図4 アプリケーション画面

を利用しやすくなり、回遊行動が実現していることが分かった。これは、従来の支援とは異なり、目的地を指定・強制しなかったため、回遊行動の促進につながったのではないかと考える。

また、従来の支援方法と比べると、利用者に新しい出会いをもたらす力が弱いという課題が見つかった。これは、まちあるきカウントシステムでは訪れる場所の選択が利用者に依存するため、利用者があえて新しい場所に行かなければ新しい出会いがないためであると考えられる。新しい出会いは、まちへの印象向上につながるため、改善が必要である。

4 まとめと今後の展望

実験を行うことで、まちあるきカウントシステムの利点と課題点を発見することができた。

今後は、利用者に新しい出会いをもたらす仕組みを新たに構築・実装することが必要である。

発表では、本システムをiPhoneアプリにも実装し、新たに実験を行った結果を併せて報告する。

参考文献

- [1]宮野麻衣、北雄介、久保圭、荒牧英治、”街歩きで作り出す都市の様相地図—位置情報付きの様相記録集の取り組み—”, GN Work Shop 2013、2013
- [2]塚中諭、木下雄一郎、”街並みの雰囲気を手掛かりとした寄り道促進システムの提案”、情報処理学会第74回全国大会、2012